

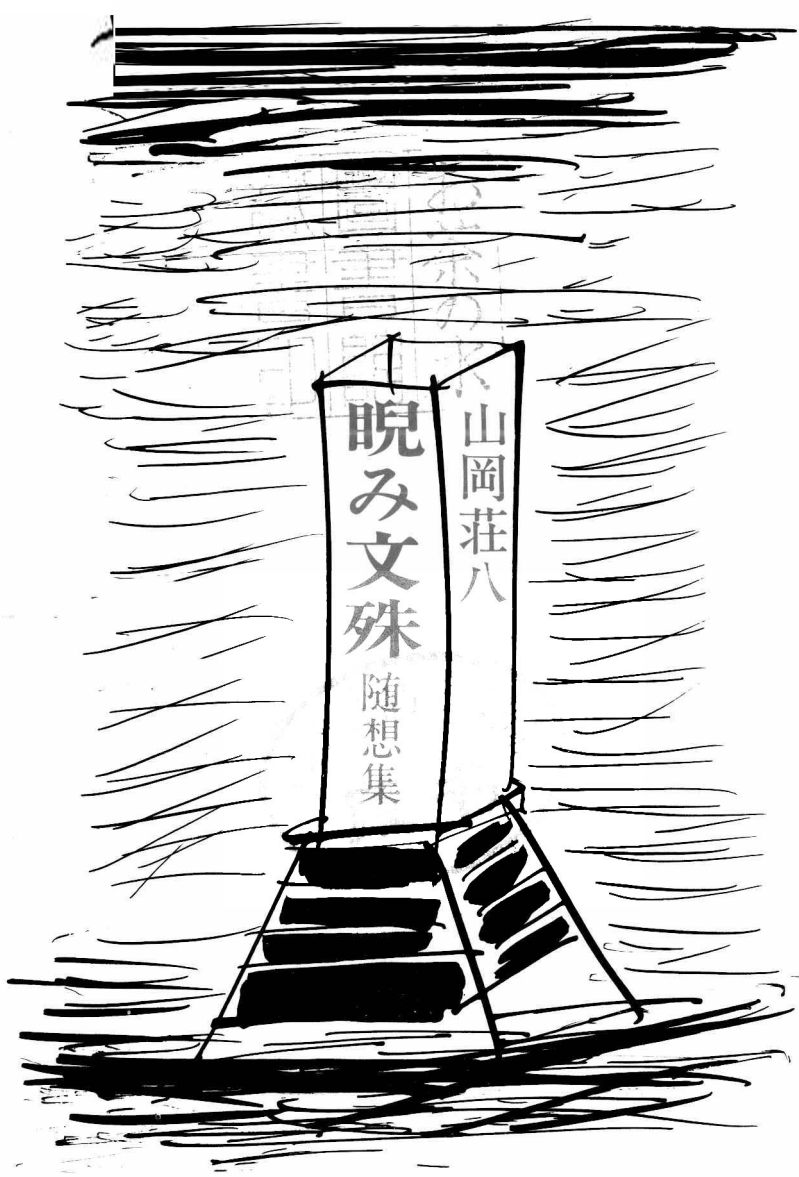
眠又殊

随想集

山岡莊八

にらみもんじゅ





講談社

睨み文殊 随想集

非売品

昭和五十四年九月三十日第一刷発行

著 者 〓 山岡 莊八

装 釘 〓 小沢良吉

発行者 〓 野間省一

発行所 〓 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二一 郵便番号 一一二
電話東京(〇三)九四五一一二一(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 〓 豊国印刷株式会社

製本所 〓 黒柳製本株式会社

©山岡道枝 昭和五十四年 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。



序にかえて

村上元三

告別式るとき、わたしは挨拶の中で、こう言った。

「七十代になってから、山岡君がどういふものを書くか、それを期待していましたが、もはや詮ないことであります」

その気持は、いまでも変りはない。

四十五年間にわたる友人づき合いだが、喧嘩好きな山岡君と、わたしは一ぺんも喧嘩をしたことがない、とあちこちに書いた。

向うが喧嘩を吹っかけてきても、こっちがうまくかわしたせいなのかどうか、いま思い出してみてもわからない。

山岡君と酒というのは、若いころから切っても切れない仲のように言われたし、ずいぶん無茶なのみかたもしていた。

雑誌や新聞社の編集者のあいだでも、いろいろと山岡君の酒について逸話が伝えられたが、そのどれもがユーモラスであった。

「徳川家康」が経営者の辞典のような読み方をされたのは、山岡君にとって会心のこ

とだったかどうかはわからない。

日蓮を書いているときは、山岡君自身に日蓮が乗り移ったようになり、織田信長を書いているときは、酒席で信長のような荒々しい振舞をする、ということが山岡君にはあった。それだけ、作中の人物に浸り込んでいたからであろう。

山岡莊八は歴史上の著名な人物ばかり扱う、という批評を聞いたことはあるが、そんなことはない。

庶民の生活を書いて、小気味のいい短篇もあるし、時代小説の中にも、しゃれたユーモラスな作品もある。

山岡君の作品を通して言えるのは、人間を愛し、いかに生きるべきか、という問題を突きつめて行ったことだろう。

それだけに、山岡君の七十代になってからの作品を読みたかったのは、わたしだけではなと思う。

この随筆集の中で、山岡君の、いろんな人間の見かた、物事に対する処理の仕方など、独特な語り口を聞けることだろう。

作品の中で、山岡君は自分を裸にして見せたが、この随筆集を読んで、読者は山岡莊八という作家と直に向い合う気持になるに違いない。

わたしのようない友達も、この一冊の刊行を心からよろこんでいる。

これを読みながら、久しぶりに山岡君と酒をくみかわすような心地になるだろう。

目次

序にかえて

村上元三

1

月と花と

9

次郎長罷通る 10 某月某日 13 睨み文殊 14 アタ名は世田谷団十郎 15 師走の
眼つき 16 私の近況 19 私の道楽 20 ままならぬこと 23 陳元賛の犬 25 炬燵
の思索 29 小唄の抵抗 32 茶釜の素性 33

星屑の歌

37

味なもの(あんこう鍋) 38 味なもの(羽二重だんご) 40 次なるプーム 42
わが家の味噌汁 45 禁酒家の弁 46 わが晩さん 48 私のさかな 49 私の酔歩漫
筆 50 私の食道楽 51 酒と私 52 私の酒 55

黄菊白菊

57

妻を語る 58 結婚指輪 60 青春乱暴記 61 三日間の自由 66 母に伊勢参りを 70
二人イッカン 71 母を語る——意地を貫ぬいた生涯—— 75 楽しく仕事だけ考える
——私の健康法—— 84 されど、わが貧乏の日々よ——私は二十九歳で背水の陣をしいた
—— 87 わが少年期の正月 99 健康を語る 103 私の新婚時代 104 私の自由 105
掌中の珠 106 育てる我慢 107 美しき夢に栄あれ 109 私の結婚 111

人間模様

雑草の弁 114 聖者の嘆き 116 余技なきが自慢 118 恐怖心のありか 119 越後美人 129 生年月日と運命 134 一筆啓上 136 無関心の関心 137 テレビ「楽劇」 138 日本を買うの弁 140 わが家の手形 141 怒りと飲びを噛みわけて 146 先生は生きている 150 人間尊重 152 長谷川先生との出会い 156 女性の値下がり 158 大鵬と泰山木 160 長谷川利行氏との出遭い 161

流水に寄せて

三連譜（ノートの中から） 166 那須山の人格 168 塩原恋い 172 北越の山河と雪 174 わが一日の朝 176 箱根山散歩 178 ふるさとと私 179 常識のケタがはずれる 180 古琴亭の憂心 182 第二の故郷 186 柳生に寄せる——正木坂道場—— 188 故郷の歴史 190 柳生の里 193 小田急気質 194

松風抄

家康と独立心 198 家康の祖母 200 この頃の鞭 205 歴史で占う後継者 208 男の心を射抜く女性 211 乱世と仏の顔 214 武士道と人命軽視 218 新春酔語 222 生まじめな田舎者の顔（徳川家康） 224 怒りと喧嘩 227 人気不人気 228

竹の窓

233

茶経室のこと 234 堂守志願のこと 237 慾経室始末 240 あやまり座禪のなかの

声 243

野分終りぬ

247

書ける時・書けない時 248 早く講座を 249 私のペンネーム 251 無謀銷夏 252 得

意と失意 255 私の取材方法 258 井戸を空にする（新聞小説を面白くするための意

見）——私の小説作法—— 259 わが小説・取り戻した作家の食欲 261 徳川家康——完

結時は定年の気持—— 263

偲ぶ草

265

(一)誓書 266 (二)若き日の誤算 267 (三)つもり談義 272 (四)愛の断片 275 (五)

あなたへの誓い 276

あとがき

278

山岡道枝

挿絵＝著者『霜汁帖』より

睨み文殊

随想集

月と花と



次郎長罷通る

われわれの仲間の中で第一の芝居好きは村上元三である。時々あちこちの舞台に立つだけではもの足らず、酒席や研究会の席上でも、怪し気な身振りで何時の間にか役者になっている。呆れた男だと舌を捲いたら、僕の不在の席で彼はしみじみと述懐したそうである。

「おれもかなり芝居は好きだが、山岡には呆れたよ」と。

どうやら目糞鼻糞の仲らしい。が、これとて敢えて理由を付ければつかぬことはない。まずもって演出の時の心得のためともいえるし、作劇上の勉強といえないこともない。

私の劇歴(?)も今では相当なものになった。

初出演は「地藏経由来」。次ぎが「お国と五平」で、第三番目が「太功記十段目」の光秀である。「モンナ・ヴァンナ」をやって、「信西」をやって「勘平の死」「鈴ヶ森」(もっともこれは文学祭の雲助だが)を経て、「荒神山」の次郎長に至ったのだが、自分ではそのいずれも見事にこなしつつもりなのだから相当病は膏肓に入っていると見られても仕方があるまい。声優としても両三度マイクの前に立っているし、朗読は日比谷公会堂と読売講堂とで入場料を取った経験があ

る。

その僕も、京都の南座まで進出しようとは思っていなかった。演しものはご存知の「荒神山」、役は次郎長というのだが、実は昨年の大晦日に右脚を折って、一座の面々から出演を促された時は、まだ病床を一步も出られない状態だった。聞けば新国劇の沢田祭だということであり、当日の売上げは広島の前爆孤児への寄金にするのだという。

僕は病床で涙を流した。さほど精進の悪い男でもなかったのに何の因果でこの好機をむざむざと遁さなければならぬのかと。

ところが友達はあるがたいもので、脚が動かなければ動かないでもよいから出ろという。いざりの次郎長などはあるまいと云ったら、そこだけ脚本を書き直しておくという返事だった。考えてみると随分勝手な話である。原作者の神田伯山も、脚色者の瀬戸英一も友人だから文句はいうまい、これが自分たちの作品だったら相当うるさいことだろう。

何しろ手弁当でその上切符まで引受けていくのだから、ご両所ともお許し下されと内心で詫びて、さて寢床の中で当日の苦心に移った。

一座は僕のほかに、仁吉の村上元三、大政の鹿島孝二、お菊の志村立美、長吉の大林清以下同勢十八人。それを稲木の文蔵の土師清二氏が団長格で引率しようというのである。

十八人となると汽車賃、宿泊料がまた問題になったらしい。そこで長谷川伸先生が自分の作品の「鯉名の銀平」の放送料を提供しようという俠援になって出発の日を迎えた。

僕は女房に付添われて東京駅まで自動車で運ばれて見たものの、まだ脚には大きなギブスをつけ、松葉杖にすがってよろめくばかりである。

これで果して伯山描くところの生きのいい次郎長たり得るや否や？ 此処が芸の見せ所と力むあとから切なくなつた。何しろ次郎長の出でドーッと来てしまつたのでは、あとの愁嘆が利かなくなる。

京都駅へ着いてあの高い階段を見あげた時と、南座で三階の楽屋と知つた時には打ちのめされた。ギブスを取ると立つことも出来ないのである。

いよいよ開演となつた。化粧だけはいかにも強そうに出来上つたが、脚はいぜんとして奇蹟をあらわさない。やむなく花道は駕籠を頼み、片手に松葉杖を携え、大きなギブスをつけたままでずっと舞台に立つた時の心境は得も云われない。と、その瞬間だった。がぜん奇蹟は現われたのである。

僕は僕が作家であつたことなどはむろんのこと、役者であつたことも京都駅で転んだことも忘却して、伯山創るところの次郎長が、其処に忽焉（こつえん）として出現したのである。

演じ終つて僕が楽屋へ引き上げようとすると、大道具の一人が云つた。

「もう此処は舞台やおまへんよって普通にお歩きなはれや」

僕はその夜、岡崎公園のつる家で千恵蔵、龍之介、右太衛門、小杉勇といった名優連のひらいて呉れた歓迎の席上で、謹しんでこう言つた。

「僕の芸を取られるのは宜しい。その点はお互いに同業ゆえ些かも構わないが、本日の僕の次郎長を後世に残して下さらぬよう、特に懇願しておきたい」
（昭和二十八年二月五日『会館芸術』）

某月某日

九時に起きる。梅雨じみた雨があがつて庭に陽が当たっている。昨夜の晩酌、日本酒二合にビール二本半のアルコールがまだ何処に残っている。庭に出て井戸端で洗顔、一匹の犬を相手にしばらく遊ぶ。

一匹は秋田犬の牝、もう一匹は紀州犬の牝、どちらも純血である。国籍不明の人間が次第に多くなつて行くので、犬だけでも純血を愛したい。しかし二匹とも牝なので、これが一度に子を産んだ時のことを考えると気が重い。もっとも先輩大佛次郎氏は十八匹とか十六匹とかの猫を飼い、係りの女中が三人いるという話だから、そのくらいのことでは恐れをなしてはなるまい。

朝食は卵雑炊。食べ終って一服しているところへ、友人の中沢至夫氏が、丹精の「宸翰英華」を持参してくれた。ほとんど実物大の歴代天皇のご真筆集が、コロタイプでついているので、その目方だけでも四、五貫匁はある。収集、編纂に前後二十年近くかかっている。これが一大衆作家の私費を投じての仕事だから頭がさがる。

午後二時から娘のP・T・Aの実行委員会に出席。帰つてからは、前後七年間新聞に書きつづけている「徳川家康」を執筆。家康さんとも、あまりに馴染みすぎたので、少し扱いが粗雑になりはしないかと自戒している。今夜は晩酌を少量にして、八時就寝、零時起床を実行しないと仕

事がさばけない。徹夜の仕事は疲れるが、これも生活なれば是非もなし……。

（昭和三十一年

五月三十一日『日本経済新聞』

睨み文殊

これは狩野永徳の州信と称した頃の文殊菩薩である。たぶん織田信長の画員にあげられる前の作品で、この画面に見られるような若さ、たくましさが信長に迎えられる原因をなしたのだろうと想像している。この絵から私は信仰的な匂いよりも不屈な生命力を感じとる。

何となく仕事に倦んで、下司の知恵に小詰りを覚えた時、これを見ているとフンという気がして来る。文殊の知恵は湧かなくとも、万年書生の血だけは結構うごき出す。

「それだけかいお前は……」

睨み文殊にそう話しかけられるとちょっと気負って仁義の一番も切りなくなる所だ。これは、どこかの寺院にあったものらしいが、私の手に入ったのは郷里の先輩からで、これがもしシシに乗っている図柄だったら私は譲り受けるのを遠慮したかも知れない。

御仏のお姿を見るたびにたかぶらなくとも、血の気は充分にあるからだ。そこでこの文殊菩薩が破戒坊主のために、こっそり寺から追放されて私と睨みあうまでの旅のことなど、あれこれと想像してみるのである。描いた永徳も若かったが、売払った坊主も、そしてそれと睨めっこする